

である。下出葉序については、普通品と同じく、第 1 下出葉は側方に出ることもあるが大抵はそれより少しく向軸側寄りになる。第 2 下出葉は正しく側方に現われる。その形や大きさについては、普通品の下出葉のよい標本が目下少いので、精密な比較は他日を期したい。成葉は今のところ普通品より葉質やや薄く、また先端の鋭尖部が短い、その形と大きさについての精しい比較は基準株が若木（挿木後 6 年）であるため、成木になるのを待ってからにしたい。托葉は形も大きさも共に普通品とよく一致する。

筆者はさきにシダレイヌコリヤナギ発表に際し、これが日本に野生するヤナギのしだれ型として最初のものであると報じたが、これは誤りであった。最初のものはシダレミネヤナギ *Salix Reinii* Fr. & Sav. f. *pendula* Kimura (東北大学理科報告第 4 輯 34: 144, 1961) であって、これは 1924 年 5 月 11 日筆者が富士山麓須走口の海拔約 970 m の所で見出した。ここに訂正し粗忽を詫げる次第である。

尚母種の学名について一言。遂に筆者は最初の示種名 *rorida* に帰った。*rorida* には Gandoger の奇著 *Flora Europae* (1883-1891) 中に先行同名があるため、Toepffer が提唱した新名 *Lackschewitziana* を採用してきたが、現行命名規約は明らかに上記 *Flora Europae* 中の学名を皆不適法としているのでこれに従った。また序に筆者の半世紀前の異名に関する考定を再検整理した。

□朝日新聞社（編）：緑と文明 213 pp. 1982. 朝日新聞社、東京。¥940. 昭和 57 年 7 月 6-7 日の両日、朝日ホールで行われたシンポジウムの速記を基にしたもので、第一部は緑の危機と再生、第二部は新しい森林文化となっていて、川喜田二郎、宮脇 昭、吉良竜夫、司馬遼太郎等の有名な各氏 8 人が基調報告を行い、引きつづいて討論をなし、さらに質疑応答をして最後にアピールを出して結んでいる。

今日、森林が急速に失われつつあり、特に世界の森林資源から重要且つ過大な恩恵を受けて来た日本がこの問題について卒先して対処しなければならない時に、こうしたシンポジウムを開いた事はまことに重要であり、喜ぶべきことである。このシンポジウムでは基調報告は数頁に終わっていて、たしかにそれだけの効果はあったし、討論と質疑応答に多くの時間をかけているのもよい。ただ話が余りに広く、且つは深刻なので各自が統一した話題に持って行くことが困難であったと思われるのは惜しいし、宮脇氏が鎮守の森に代表される常緑広葉樹林の保存並びに再生を主張するのがやや孤立の観があるのも物足りない気がするの抄録者のひがみか。このようなシンポジウムはただの一回切りで終らず、何回もつづけ、はじめて効果が挙がるものと思う。 (前川文夫)